

英国国教会の牧師からカトリックの司祭へ

もと英国国教会の牧師、Evans Gliwitzki 師が今年カトリック教会に受け容れられ、スペインで司祭に叙階された。既婚者であったので、独身を免除されて。ABC 紙のインタビューでその経緯を語っている(2005年8月23日)

* * * * *

Gliwitzki(64歳)はジンバブエで生まれた。父はポーランド系のカトリック信者で母はイギリス国教会の信者であった。彼自身カトリックの女性と結婚し、二人の娘をもうけた。1984年に国教会の牧師になる。カトリックとの対話のための委員会で働く。個人的にも、国教会側の代表者としても、このためにローマにも何度か足を運んでいる。

インタビューにおいて、自分がどのようにカトリック教会に接近したかのいきさつを語る。「この変化が私に生じたのは、1992年英国国教会が女性の牧師職を認めたときです。この事件は、私そして国教会の聖職者と司教の一部の信仰を根底から揺り動かす大問題となりました。私はそれは決して認めるべきではなかったと信じています。」Gliwitzki はイエス・キリストの行動とその後の伝統を理由に挙げる。「国教会には聖餐の式を挙げる女性がいるわけですが、私はそれを認める理由を聖書の中にもっと見出せません。なぜなら、主はご自分の使徒団に一人の女性もお選びにならなかったからです。もし女性をお選びになりたかったのなら、いくらでも適任者がいました。聖母マリア、マグダラのマリア、聖なる婦人たちなどなど。」この国教会の変化を前に、と Gliwitzki は話を続ける。「私は考えました。『教会内でこの問題と対決するより、この教会を出るべきだ』と。それで、私は英国国教会を去りました。しかし、私の司教様とはその後もよい関係を続けています。司教様は私の決断に理解を示し、私を助けてくださいました。」

ジンバブエのあるカトリック司教の援助を受けて、Gliwitzki は自分を受け容れてくれるカトリックの教区を探し始めた。色んな国の司教協議会に手紙を送ったが、最初の返事はスペインから届いた。それはカナリア諸島の司教フェリペ・フェルナンデス師からのもので、師に任せたい仕事がある、と書く。Gliwitzki によれば、「島の南に任せたい仕事がある、と言われたのです。そこには多くのイギリス人が住んでいるのですが、英語でミサを上げるカトリックの教会がないということでした。」必要な手続きと勉強をした後、この8月21日フェルナンデス司教は彼に叙階の秘蹟を授けた。今から Gliwitzki 師が奉仕職を遂行する教会で、師は「主任司祭の監督下で仕事をします。それが教皇庁の示した条件でした」と本人自身が説明する。

結婚している司祭という身分について、Gliwitzki は次のように強調する。「私の場合は例外で、カトリック教会の規律が変わったわけではまったくありません。教会は単に私の身分を受け容れてくれただけです。私は牧師の結婚を認めている別の教会から来たもので、カトリックの司祭として結婚する権利を主張する者ではありません」と。

(ACEPRENSA, 2005年8月31日 9月6日、96/05)